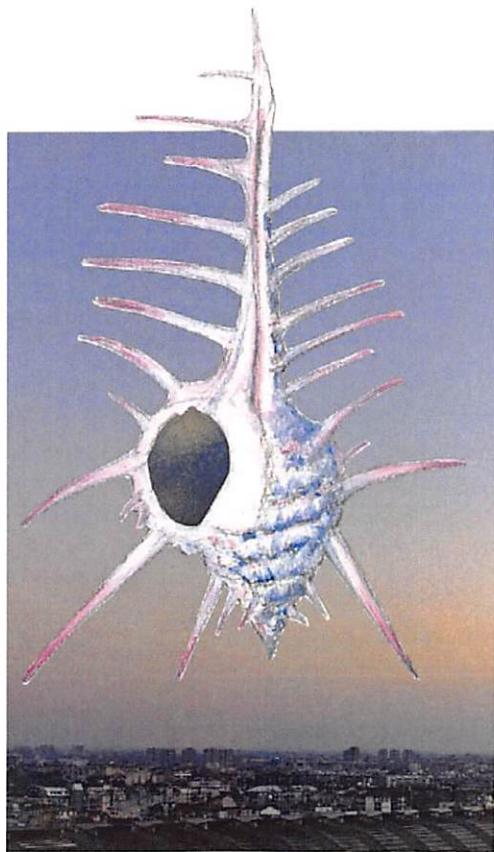


# 地中海

MARE MEDITERRANEUM

2020. 9



令和2年9月1日発行(毎月1回1日発行)第68巻第9号

No.748

## 創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の鄉愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生史的なものだ。別ないかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しました北上した、すべての未開なもの同化してきただ大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ氣持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

# 地 中 海

一〇二〇年 九月号 (通巻七四八号)

◇今月の二十首詠……雲の流れ

大島真清 2

■作品[A]

中島央子・中島義雄他

■遊覧寄港  
〈歌枕 吉野逍遙〉

松谷公汪 63

B A

中川富美子他  
中江京子他

木村文子 48

A C B A

永井秀次郎他  
大久保徳子他

磯田ひさ子 69

■オリーブ集

長畠美津子・仲西正子 40

■歌壇月旦  
歌会の在り方

磯田ひさ子 70

◇今月の二人

笛崎愛子・唐澤美恵子 16

■七月号作品批評

山野幸司・田中純子 69

■仲西正子歌集『まほら浦添』批評

36

■遊覧寄港  
〈歌枕 吉野逍遙〉

木村文子 48

琉球の勁烈な精神  
レキオスの子よ健やかなれ

田村広志

A.....牧 雄彦・菊地栄子

山野幸司・田中純子 63

香川進の生きものの歌 23

田土成彦

B.....奥田陽子・筆谷幸子

奥田陽子・筆谷幸子 63

香川進・その周辺

高尾恭子

C.....中村恭子

中村恭子 63

私と短歌との出会い (217)

久我田鶴子

オリーブ集.....国原喜美子

国原喜美子 63

◇秋のアンソロジー〈秋を創る〉

北山雪男

久我田鶴子 18

久我田鶴子 95

今月の二人・作品評

〔編集部〕

久我田鶴子 18

最近の歌誌より

神田通信.....表3

神田通信.....表3 95

## 雲の流れ

大島 真清

昭和三十一年「地中海」入社。  
大阪支社所属。

香の煙めぐらす施療の四十分温灸ゆるやかにわが身にあびる  
 ちかちかと目を刺しきたる日のひかり身より失いゆくもの多し  
 ざわざわと葉音のたてば冴えきたるこころにかすかにじむ望郷  
 夜の電車のあかるさにただ淋しくて十六歳の旅立ちをせり  
 ふるさとを離れし汽車の黒煙と汽笛はおぼろ遠くすぎゆく  
 家離れ乗りし電車に夜のあかり男子学生群がりいたり  
 起きおれば終日ねむき日々もすぎただ伏しいたる身となり果つる  
 しらじらと地に湧き立ちし山霧は時経てもなおわが目いざなう

曇りガラスに薄らに見ゆる緑さえ入りくる自然の息吹のありて  
人参の花みてみたしと佐太郎の歌を読みいてしきりに思う  
青き壁のこときに空は窓一面はりつきいたり日覚めしまなこに  
活きいきと箕面の山と豊中の街ひらけいてああ空高し  
まぼろしに水の流れの音のたちなみなみとして北へとむかう  
変わりゆく雲の流れは日もすがら悲しみよろこび吐露してよぎる  
いたき背をかかえて向かう孫の顔痛みに勝てる愛もあるべく  
夜の窓に映る病室の光と影しづまりわたる闇をふくみて  
一畳のベッドは我の舟なれば大海原に魂いざなえや  
しづまりて屋内におれば車の音きしみて過ぎゆくところそりて  
主をほむる歌をききつつねむらんか夜の更くるに身をまかせつ  
長き夜を聖歌にこころ傾けてねむらんとするひとり淋しく

# 作品 A

中 島 央 子

籠る(三)

森

永 塚 節 子

桜

銀

テープルに紫陽花咲かせ人遠く何処へもゆけぬコロナの休暇  
自宅待機まづは書棚の片付けをながびく程に時間がとまる  
オンラインわれには不思議足留めの娘は友と夜のお喋り  
ウイルスに足留めされて覗る録画チャップリンの「モダンタイムス」  
読書にもTVにも倦み横になる脳よ呆けるな脚よ萎ゆるな  
可もあらず不可もまたなく一日過ぎ夕餉に添ふるワイン一杯  
吹き抜けの玄関先にふき上ぐるアラフォーの孫の甲高き声

中 島 義 雄

あらがひ

岡

白 子 れ い

青き雨

洛

梅雨の空深き濁りを宿しつつ東都に罹患の人増ゆといふ  
「死者何名」ニュースに数のみ知らされて人は無念の疫病に消ゆ  
籠もり居を強ひつつ今日も明けむとし星むごく照る曉の天  
梅の実の熟れて匂へる野の道を罹患のがれし子が帰省する  
通学児に「お帰り」の声かけやれど病菌のごとく我を逸れゆく  
幾代も文系に疎きわが家系語りつつ童と豌豆を剥ぐ  
やすらぎは何に兆すや夕顔がほつかりほつかり灯を点しゆく

季移りふたたびの夏世の中の騒ぎをよそにのうせんかずら  
咲き競うのうせんかずら昨年までは夏を越えゆく力でありし  
寄りゆけぬ心見すかす朱の色のうせんかずらは何も答へず  
黄色なるくちばし四つ透き間なく小つばめたちは弧を書きおり  
軽やかに行きては戻り梅雨空を小つばめたちの嬉嬉と飛びかう  
明くる年のさくら咲く頃平らかな時間と共につばめは帰る  
のど元に抜き取れぬままの棘ひとつ次の桜を愛でる日ありや

# ぱぱりょうこ

ポッポ ポボボボ

・鹿

短足ねエーと揶揄されながらエンビツはキャップで背のびし健気に活躍  
さみしいかさみしいねエと山鳩のぐぐもる声に呼応しあいぬ  
ひとりごと洩らしたればこの耳はしばらく余韻をただよわせにけり  
鳴時計あらぬ時間に刻を打つボッポ ポボボボこわれた声で  
方向の音痴も時に楽しめり迷い子となりたる街の覗きみ  
故里は喪いたれど「ただいま！」と胸張りゆけるヨン子さんちが  
「お帰り！」と声のぬくとさ鄧びたる風をまといたる笑顔が待ちぬ

# 浜 谷 久 子

桑の実

・地

鳥の落とすむらさき桑の熟れどきの便りといつかの木立に向かう  
紫に染まる手の指桑の実の淡い甘みがほろぼろ落ちる  
桑の実を摘んで背伸びの足を刺すあざみの葉っぱが見張り番する  
桑の実の甘みほのかな幼なじ茱萸の実野いちご摘んだあの日の  
桑の木のいつしか伸びて実のたわわ鳥の運んだ種はまちかに  
手も口も紫に染め桑の実と遊ぶ初夏木陰のひととき  
桑の実のあとかたもなく茂る葉を揺らす夏風野の遊び風

# 浜 本 芙 美

ほどほどの

・夢

何時ものように買物に行つてくれる夫案じて空ばかり眺めたつ  
よき夫よき友どちらに恵まれて米寿の日々の安らかにあり  
蛇口より落ちくる零みていしが何か悲しく眼そらしぬ  
このところ声を荒げること多くなりたる夫さびしくなりしや  
真夜さめて疲れぬことの珍しくつまらぬテレビのコマーシャルみる  
晩年の兄の言葉に夫のことば重ねぬ兄弟とはよく似るものよ  
年とれば夫婦といえどもほどほどの距離を保ちて日常おだやか

# 檜垣美保子

水面

・昴

雨降りし昨夜のつづきのかがやきにみどりをたたえ蛇の池は待つ  
坂道をのぼればふいに睡蓮の群落 すこし水面のかげり  
木の坂に土留めされたるきさはしを三つ降りればゆらめく水面  
水底にみなつながれて睡蓮の葉は池の面にびっしりと浮く  
赤み帶び黄み黒を秘めている人生のようなる数千の浮葉  
ゆれやすきその茎の丈黄の花のタンボボモドキ風を見せおり  
山道にゆきあえばひとつあいさつをかわし過ぎゆく落ち葉踏みゆく

# 福 田 庸 子

風のさやぎ

・今

ふくらみて風が知らすよ初夏のカーテンゆれてコロナ禍脱出  
人と人の会話なくしてゆく世なり風のさやぎを語りあひたき  
かたときもスマホ放せぬ族を作り脳の構造変へられてゆく  
かたはらに山よりくだりくる水ありて常に激げる豊かなさもちぬ  
穢れとる水の清めは古くより村の社が教へてくれし  
手洗ひの勵行コロナを寄せつけず豊かなる水に神見し祖達  
豊穣も禍も水の神の技遠き祖達の祈りをたどる

# 藤田美智子

紙風船

・新

ゆつくりとミシンのペダル踏みながら若かりし日の母と語らふ  
からつぱにしたき心と共鳴す紙風船を打ちたる音が  
どの部屋の時計も同じ数字なり遅れてばーんと鳴る音もなく  
占ひを少し信じぬ夫婦より同志に近き一人と言はれ  
搖れようと枝もしてゐる折からの風に揺れてるやうにみえて  
かああと鳴くは哀号に似る響き一羽の鶴になにがありしや  
「震災直後のはうが気持ちは楽だった」歳月は隔つ人と人との

藤森巳行 父の日

銀

松浦禎子 観音堂まで

羊

父の日に子等よりビール届きたり妻より発泡酒との差は何だ  
長女より届きしビール三カートン呑みすぎ注意のコメント添へて  
父の日を祝ひ家族で餃子食ふ妻の手作りニラが多めの  
歯噛みして堪へた時代があればこそ今の自分大事にしたい  
激動の時代を生きる尊さを胸に抱きて妻子と歩む  
一瞬も立ち止まらずに生きてきた我等が使命の広布の道を  
子育ての失敗生かし孫育てかかはる日日なりただ可愛がる

船田清子 空も晴ればれ 天

松永智子 一羽

嵐

コロナ禍の憂ひ投げ飛ばし初戦より空も晴ればれ汝が笑みに逢ふ  
第二戦12対1とは快挙なり 坂本健在二ホーマーの快  
宿敵の巨人・阪神巨人に凱歌早々にして三連勝す  
十六夜の光漏らさじと受けたる夕顔の白に逢へず数年  
二人して愛でし夕顔・野ばたんも時計草も消ゆ身めぐりの道  
喜光寺へ持ち帰られし菩提樹はつひに根づかず母の地を恋ふ  
側溝へなだるる傾斜に従ひて押し手を無視するシルバーカーは

牧雄彦 京・大文字山 大

三浦好博 生活様式

眺

応仁の乱を語りて祖父と孫右の段ゆく観音堂まで  
この土地の柿の名物禅寺丸山永井家の縁台の前  
義貞に焼き払われし王禅寺その地に住みいしひと一人あり  
古い家におばあちゃんがいると寄りて来し童女はいつの世にもかわゆし  
初穀を飛ばす機械はひっそりとわれを呼びこむ土間のすみより  
古民家の木戸の取手に触れんとし七十余年前のあの時  
小半日小鳥の声につつまれて一人占めするこの世の贅を

コロナ禍のゆゑか行きあふ人の影まばらにて山はしづかなりけり  
一望の京の町並みみどり濃き四角は御苑ぞ鴨川の西  
西山にひときは高きは愛宕山残雪踏みて春に登りき  
見おろせる右の山裾あああれか姉の逝きにしバブティスト病院  
急斜面しかと踏みつつ下りゆく振り向けば「大」の文字がタづく  
旧宮家の山荘なりしといふ茶房栗の若葉を縋ひて風呼ぶ  
傾きたる日に照らされて柿の葉のつやつや光れりよきひと日なり

自警団は直ぐ復活す「竹槍であなたが私を笑き殺す前に」  
海に沿ふ道をハーレー集団が行くよ自粛の違反は我也  
新しい強制だとは言ふまいぞ「新しい生活様式」は  
「報國は生活改善から」コロナは「新しい生活様式から」  
三浦氏の休眠打破はまだならぬボーといち日何するでなし  
ゆつたりと四時間過ぎぬ「眼鏡かけるモーツアルト」の頃見てゐるうちに  
左巻き右巻き振花相寄りて群咲きのたり歌垣ならん

宮 本 靖 彦 女 孫

・凌

くちなしの香に憶ふ京北山の群生愛でし友等は如何に

山行は速くスーパー買物にかつぐりユックとなりて役立つ

いつ増ゆるかいつはづかと眺めをり一人おきなる昼の地下鉄

インバウンド消えし橋筋若きらのマスク遊歩に吾もまじりて

テレ講義のアシスト勤むる女孫見て手つなぎ遊びし幼時をおもふ

老夫婦両手に杖つきのぼりゆく我が家の前なる刀根山坂を

雨つづき淵に渦まく千里川暴れん坊の昔の顔見す

三 好 聖 三

田舎日常

・伊

畑とは人に遇わずに済むところ流浪の舟を漕ぎ出すところ

『椋鳥』の序章の不気味、目交いの土を突ける椋鳥の嘴

だんご虫あまた蠢く畑中の量水計の箱を開ければ

二の腕にシオカラトンボが降りて来て煙草の味を問い合わせ正しくる

モルダウを流せる古き楽器店けやき並木の下に傾く

校庭の柳の下で素振りする嘘吐き小僧の浩太はひとり

大降りの雨が小降りになるころを法要終る母十三回忌

御 代 田 澄 江

生き抜かんとす

・茨

母の住む家に来たれば立哨の猫が屋根からわれを見おろす

猫の腹の温みに添うるははそはの母の手のひら當ては柔き

麻酔から覚めるのかと母は問う股関節手術を受くる日の朝

麻酔の背広なれども着て会えば母はまぶしく我を見つむる

母の日に母をさそえは助手席に囁りやまぬ一羽の小鳥

父とゆきし旅を懷かしむ母を乗せ青葉の路を流を見にゆく

小一時間のちいさき旅も思い出の一つとならむ母との時間

八 乙 女 由 朗

七 タ

・柴

青竹に吊られ織姫の姿見す吹流しこそ主役をなせり

就学前自在に折りし折紙の今あらずして折紙は鶴

ころもぬきて仏のおらぬ身となれりあからさまなる身を隠しけり

屑かごを吊るせばゴミはありがたし捨つる身ほどの屑にありせば

意外性もちてわれらを昂らす巾着切りの映画がありき

一つには短歌はじめ希いなり短冊書けば満てるものあり

茂 木 斌 篠 竹

・埼

篠竹に天と地のあり上まるく下は角にて地をあらはせり

藤井七段藤井の姓に法然の俗名藤井元彦浮かぶ

太平山あぢさゐ祭り中止となり駐車は常の無料のままに

庭に咲く知らない花を妻に問ふイキシアだよと得意気に返る

雨戸繰る今朝の庭先白花のホタルブクロがおはやうと咲く

里山の小道の葉かけ木苺の熟れし実なつかし四、五粒を食む

多目的トイレの使用方法に渡部式あり暴かれあはれ

もとむらしげと

母

・そ

球児五万人に甲子園の土届けんと球団が贈るキーホールダーに詰め  
高校に通ふと孫娘來て娘も來たり同居家族増え少しさはなやぐ  
水道の検針員來て使用量急増に水漏れ問ひてゆくなり  
家族増えしこと伝へつつよき仕事為せると思ふ 当然なれど  
コーピーテリとふ業者も使ひ配達も受け厳しき日々を生き抜かんとす  
朝まだき露を含めるどくだみの白き花採る茶葉と為すべく  
敷地内の清淨とくだみ根茎葉花全草を探り洗ひて干しぬ

柿の渋ぬりたる網は長持ちし幼き時代を豊かになせり

山 下 雅 子 ポスト

・習

吉 永 惟 昭 梅 雨

・熊

拂ごしに白き傘見ゆ知らぬ間に予報どおりのこぬか雨降る  
失いて知る大切の大切さ抱きて歩む杖を握りて  
望むこと叶わぬままのなりゆきにしたがう日々の鐘よ緩むな  
些細なる今日のよろこび通過のたび青信号に変わる間のよさ  
町角のポストはすっぽり濡れおらんあまた便りを抱き黙して  
三回が二回に変わる塵回収それのみに狂うわが一週間  
ままならぬ身動きなれど荀や蓮根味わうその歯応えを

山 野 幸 司 蛙

・沖

わが朝のスイレン響うす桃に触れず田んぼの草刈り始む  
一鉢に一輪だけのスイレンの首伸びやかに朝陽食みおり  
伸びやかに時には背伸び田の中に蛇の横切る苗を刺し次ぐ  
皺枯れし死骸スッポンゆっくりと土となれわれの棚田に  
畦越えにくるり宙舞う老体の着地田中蛙となれり  
田植機の跡に崩れし苗かなしにわか百姓中古の機械  
一日中田植え田植えと天仰ぐ燐々と照り早苗喜ぶ

横 田 敏 子 朝の風呂

・福

庭木々は朝の光に匂い立つ昨夜の雨のたっぷり吸いて  
散歩する犬を目に追う隣屋の猫は出窓にじっと動かず  
山形のサクランボ届きひと粒を口に含めばコロナを忘る  
赤きバイク止まりてポストに文届くコロナに籠れば浮き立つ時間  
九十の義姉はボソリと「コロナでは死にたくねえな。誰にも会えね」「  
日々の疲れ大きなマスクに押し込めて都知事は今日もコロナを見  
鍵掛けて留守電にして日曜の朝の風呂に心放てり

散りしぶき暮情持てる梅雨なれど被害なしには季の終らざるか  
百年を計す豪語の治水策十年待たで政変に消ゆ  
川辺川ダムムダ完成間近にて沈まぬ湖底の故郷となる  
昨夜来経験なきとう豪雨とや氾濫告ぐる南九州  
川下る風情一変滔々の濁流荒るる球磨は急流  
これ程に情報社会誇り居るに昼まで同じ早朝の動画  
洪水はボタ石削り流し揉み丸く磨きて岸に転がす

朝 井 恭 子 山茶花

・森

北斎も描きしという手古神社高き石段見上げ礼なす  
山茶花の花のこと小さき靴下の片方落ちおり鳥居の下に  
鳥居下に拾いし小さき靴下を石灯籠にまかせ帰りぬ  
裏山に六月を鳴くうぐいすの声のんびりと「どーでもいいや」  
窓の辺に花の鉢植えあまた並め花咲ばばあの日々を楽しむ  
ゆさゆさと葉ばかり茂る木犀を「咲かねば切るよ」と些か脅す  
夫の住む彼岸も夏になりたるや聞きててもみだし風になり來よ

磯 田 ひ さ 子 ランドセル

・森

はじめより休校の日々にランドセル背負ひて遊びに来る一年生  
コロナ禍の自粛解かれて六月の新しき街を自転車漕ぎて  
花すでに桜も藤も終りたり籠りゆし間に青葉回廊  
墨堤のさくら並木の朝をゆく匂の青葉に包まれながら  
アガパンサスあぢさる浜木綿咲く堤 自転車止めてきのふもけふも  
日常の制約多き世を生きるをさなければまして劣し  
透明の細きに満つるさみどりの液肥を百合の鉢に注ぎぬ

市 原 志 郎 野 球

・萬

奥 田 陽 子

ビロード草

・羊

いただきせんべいに音立て食べており入れ歯のあらぬ口の奥にて  
水に濡れ輝く葉末揺らしつつ飛びたつ鳥が今朝も数匹

ようやくに野球が見られる頃となり病床の中楽しみにけり

大雨とコロナのニュース聴き居つ夕暮れとなりたり今日は梅雨入り

梅雨なればふとんの中で過ごすことはとして今日もテレビ観てている

七夕を祝うことなく孫たちは学校に行く嬉しげにして

梅雨近き窓より吹ける朝の風ほんわりとして窓の外行く

市 原 や よ ひ

貸農園

・萬

小 野 雅 子

日々

・羊

口述筆記とまでは言わね夫の詠む歌をばつぱつ記して行きぬ

耳遠くなりたる我が聞き返す漫画のような口述筆記

窓伝う雨の季のその向こう黄色い合羽の幼子一人

いつの間に過ぎて行く日日いつの間に梅雨の雨に降り籠められて

二世帯の子の玄関に踊る靴まだ一人しか帰っていないな

「井戸完備」「耕耘機あり」貸農園の看板立ちぬまた新しく

空きのある貸農園はうら寂し人影もなくコロナ禍故か

大 浪 美 雪

マスク

・森

神 田 鈴 子

太閤園

・大

ガーゼもマスク縫いつつ亡き母と話をしている「これでいいかな」

三密のみつみつあんみつみつに天草を煮んあれ?

トイレットペーパーをさげ見上げたる今年の桜コロナ禍さくら

電気ガス水も変らずコロナ禍を陰で働く人を思いぬ

半年前予約の検査延期となる不要不急の患者なる吾

要請に休止となりたるヨガ教室フリーランスの講師やいかに

コロナ禍に赤き唇マスクの下に父似の眉は帽子にかくし

抜かうかと思ひるし草は薔つけ赤き小さき花を咲かせぬ  
初夏の陽は明るく射して一面の白詰草はそよぐともなし  
ブロッコリー、パン、ヨーグルトそのどれが切れたら買物スーパーへ行く  
欠品が少なくなりて日常は戻れどウイルスの影つきまとふ  
日曜にすること二つ注文書を書き「金のなる木」に水をやる  
音もなく今朝も花びら散らしる斑三片アルストロメリア  
雀より小さき小鳥とび来たり濃き新緑の中にかくれぬ

半世紀ぶりに訪める太閤園庭のヒノキは大樹となりぬ  
この園に挙式をしたる遠き日の打ち掛け姿の友のおもかげ  
コロナ禍の配慮をみせて玄関に検温、消毒の洗礼を受く  
同窓の三人の逢ひは三年ぶり互にマスクの品定めする  
久びさの会席料理の座敷にも心配りのソーシャルディスタンス  
二時間の会食終へ喫茶室コーヒー一杯に話は尽きず  
三ヶ月あまり籠りし鬱憤をやや晴らしたり足どり軽し

菊地栄子 手触り

・湾

國井節子 忘れ草

・春

野辺にさえムスカリの花咲き揃いコロナウイルスを日々に云う  
二・三波の想定なし拒絶する施設使用の前納料を  
今年こそ旅のコースの定まるをコロナはいつまで足留めをする  
限りある七十路の命急かせつつ自縛自潔の家籠もりする  
「飛び出した」と言えば反応著しわれ自立すると家飛び出しぬ  
滑らかな布の手触りまた触る齡重ねつつ纏うスカート  
いかほどの記憶にあらん入門書閉ざして恋の明るきに立つ

木村文子

風をおこして

・羊

河野繁子 美しきつぶ

・雁

埋めたてし沼のうえに人々が犬が走りぬ風をおこして  
訪れる人の少なき池の面に鴨の親子が浮かんでおりぬ  
真ん中に小さな島があるごとく葦は密集して夏を待つ  
鴨は群れくるくる水面を回りおりエサ啄みつつひとつところを  
公園のみどりさみどり足もとのはるか下にはゴミの層あり  
池に手をひたして水の清さあり河口に近きこの沼の端  
沼の端は古い地名と知らされてバス停「沼のはた」で待ちおり

草刈十郎

かたつむり

・世

小西美智子

期日前投票

・大

家居統け春愁の空仰ぐのみ何なすべきか日々迷ひつつ

われもまたコロナ難民気がつけばいつの間にやら春の果てたり  
背丈は親竹よりは高けれど皮脱ぎ残す若竹のあり

日当たれば葉裏へ回りしかたつむり遅々たる歩みなれどすばらし  
ただならぬ夏のマスクの横行は正に異常の夏となりたる

背を丸めとぼと歩くは已なり現実映す鏡の確かさ  
こと」とくマスクの首相の話しうりただ何となく懷疑的なり

帽子着て顔半分にマスクして水無月の空見上げつつゆく  
笛藪にまだ鳴き足らぬうぐひすの音色を聞けば心の晴るる  
垂仁帝の御陵の森を白く染む白鷺の群 恋の季節か  
清純な少女のやうな白き花十字にひらく十葉の花  
種を播き庭に咲きたる向日葵のゴッホの絵から抜け出た形  
明け方の雨音にふと目ざめたり虫袋はうつむきて咲く  
吾亦紅キツネノカミソリ野甘草 辻さんの庭の忘れ草かな

帽子着て顔半分にマスクして水無月の空見上げつつゆく  
笛藪にまだ鳴き足らぬうぐひすの音色を聞けば心の晴るる  
垂仁帝の御陵の森を白く染む白鷺の群 恋の季節か  
清純な少女のやうな白き花十字にひらく十葉の花  
種を播き庭に咲きたる向日葵のゴッホの絵から抜け出た形  
明け方の雨音にふと目ざめたり虫袋はうつむきて咲く  
吾亦紅キツネノカミソリ野甘草 辻さんの庭の忘れ草かな

二台目のセブンのサポート終了とこの奥深き一部に慣れて  
キヤッショレスの還元うけず老人の預金の利息○・○○一  
寄り添うとやさしき言葉口にして責任のがれ賤易と聞く  
山ほどの葉より分け卓上に色とりどりの美しきつぶつぶ  
胃袋の処理方法など思いみる夫の薬の大きな袋  
しんげんに葉の山をくずしつつ三回分を器に分けて  
仕事おえ庭師の報告蜂の巣の一つはすすめ蜂の巣でしたと

傘をさし杖をつきてはかたからんゆのはれ間を投票にゆく  
期日前投票に行くあまく匂うのうぜんかずらの落花を見つつ  
二人そろいて投票するを幸いと新しきセンタに心いそげり  
二人のみで密になりたるエレベーターしみつつ上の投票所へと  
消毒済みの鉛筆三本置かれいて端より一本取りて名を記す  
ひと仕事終えたる思いに投票所出て大きく深呼吸する  
二人して外出するもひさびさに通院以外の目的をもち

小林能子

「ウイズコロナ」

・羊

坂上直美

梅雨時

・天

百年前スペイン風邪は軍港の町よりひそかに横浜に入り

抱月はスペイン風邪に奪はれぬ快復なせる須磨子もやがて

船旅を愉しむ人とコロナウイルス横浜港は沖に迎へつ

肺炎もインフルエンザもワクチンに封じ八十路に杖を握りしむ

道路際にハコベラ、イヌノフグリまで馴染みて優し帰化植物たち

日本の土に馴染まず種子のまままた風に乗り去りしもあらむ

自治会の福祉サービス給食も再開し「ウイズコロナ」の暮らし

鳩の目

・虹

坂出裕子

マスク

・洛

目の周り公園に遊ぶ子ら増えるコロナ現象休校に慣れ

外出の足をとどめるコロナの禍体のうすく動物なれば

甘やかな春雨の香をかきながら階数えゆく空への運動

マンションの階段に会う住人のマスクを避ける高まる息に

踊り場の手すりに鳩の休みいる驚きいる日を驚き見入る

階登る今日の運動十五階雨吹き込みぬ春の前線

春雨に止まぬ駅前再開発新築マンション濡れつつ伸びる

・信

佐久間晟

日乗(三六)

・湾

使徒パウロ海を渡りし情熱を想ひつつ見る『新約聖書』

旅人が手にする聖書人間の浄化されつつゆくのだらつか

淘汰されし『新約聖書』と思ひ見る若き日吾娘の書き込むページ

浄化とふ芸術のそれと聖書とを比べみてぞり旅のひととき

朝ななな一ユーロをおく枕もと会はぬ相手へ心づけとす

スマホ手にゆきしかカラカラ大浴場水はなけれど声が聞こえる

遺跡群ねむれる古都の上空を白き軌跡にジェット機のゆく

いつしらに妻も老いたりしかすがにわれを見守る思いは日々に  
老いらくの恋など思うこともなしだ生きている日々は重たく  
いつまでのわが命かな思うだに末は果てなし拒むことも無く  
師の思い未だも深く身にあればやはり偉大なりあの面構え  
時折は出て来てわれを叱られかしこの頃弱りしわれの心を  
死とは何。この頃しきりに思うこと生よりずっと樂な氣のして  
純粹な思いとは何死を前に確かその気になつてゐるのか

佐藤道子 マスク

・甲

閔根和美 中庭

・埼

朝の散歩朝のジョギングマスク満つアベノマスクの届かぬうちに  
くしやみ一つ袋だたきに会ひさうな自肃警察おお怖日本  
エチケットとなりつつあるかマスク顔一人歩きも犬の散歩も  
テレビ医者遠慮がちに注意する鍛へる時は息気をつけて  
なじまねば非国民と言はれさうわからぬワクチン強制さるや  
夫逝きて三人のみなる空間のやたらに広き我が家となりぬ  
一度撫でし犬はいそいそ飛んで来る友と話せぬ学童かなし

### 鈴木結志

永存の自力

・福

俗なるを嗤うな筆の手遊びに生きの長らい書芸に学ぶ  
永存の自力を筆に念込めて古筆意連の技を育む  
うたに書に時が折りなす年重ね隱語覚えて餓鬼げ忘る  
うたを詠む変身転生夢のいろ筆におのれの生きを満たしむ  
鄙の地に育ち一枚舌知らず山紫水明友としきる  
月青く時のぬすびとまで出でて詩情にひたるこころ温たむ  
逢瀬川風土記発祥の地思わせてたきつ瀬しぶき丸き虹織る

### 閔根榮子

いつか

・埼

土壌また歲のかごめる中庭に石神三体ひつそりと立つ  
文化四年八年天保八年の稻荷明神また弁財天  
江戸もはや傾くころに石神をつらね祀りし父祖の心や  
伐採の大木の根は張り出だし屏たおさるる歳剥落す  
いつまでを保てというか壊すことなくこわるるを待つべしと聞く  
無縁かと思う家紋の鬼瓦十字をしるすが捨てられてあり  
屋敷森切りひらかれて氏神の祠にあたる陽がさんさんと

### 高尾恭子 歳月

・大

家族会の父は老いたりモロゾフの大きプリンをふるふる崩す  
とつとつと朝を語れよ明けぬ夜の星の牧場に子を尋ねつつ  
痕跡は荒磯の海に消えゆきけり夕べ千鳥のひと声を聞く  
やすやすとアサギマダラは渡るべし一直線に木槿さく街  
行列のできるパン屋にふわふわの明日を買いたし街は日暮れて  
堀川高校六期生の早紀江さん数字に埋まる一人として  
モロゾフの割れぬコップをためこんで予定調和のひと日を終えぬ

### 高津砂千子

グレー

・風

公園に子等遊ぶなき幾月の砂場に梅雨の雨溜りおり  
怠れば荒草にまぎれ葱坊主の出でてしまいし葱を抜きおり  
着ることのなき服をまた仕舞う「いつか」は来ないと承知の上で  
今日といふ日は終る念入りに毒ジャムを作りしのみに  
ようやくに会合許されし公民館間隔保ちて笑顔を交わす  
線状降水帯とぞ九州に大洪水の起きし無慘さ  
レベル5の「命を守る」ひしひしと球磨川の流れ怒涛となりて

滝田靖子 マスク

・新

田土才恵

フック

・宙

週に四日働きて得る収入の割に合はぬと思ふ貧しさ

配給と支給の違いは何だらうマスクは週に一枚と決まる

使ひ捨てに出来ないマスクは不潔ではないのかなどと誰も言はない

麻薬金庫から出されたる配給の使ひ捨てマスク一枚受け取る

使ひ捨てマスクを金庫に保管する大真面目なこの馬鹿鹿しさは

八千歩を歩いて終はる一日の湯船に固き足さすりをり

医療者への拍手は雨の神宮に轟く万歳の声に似てゐる

竹下妙子 はつ夏

・霧

玉井綾子

侵入生物

・羊

ゆられつつまどろめる時バス止まりあけぼの色の少女ら乗りく

待つ便り今日こそは来むとはつ夏の耀ふ若葉の吹く風をみつ

夜半覚めてはげしき雨の音を聴く何の夢みて高なる鼓動

わが夢に夜々ひらく野を影のごと過るはいつも君なりしかも

はつ夏の若葉風吹く岡の辺にたれより遠き彼岸のある人

散りしける椿の花を掃き集む足の痛みを知る夫は亡し

裡がはに踏み入るを避け話しする友も寂しき独り身なるか

田土成彦

人力車

・宙

虎谷信子

季うつ

・伴

天上に風生れてゐむ蓮の花うすきくれなるにいま開きゆく

野々宮の竹藪の道をいましがた人力車過ぎてあとは木漏れ日

ミニライト無意味に点けてまた消しぬ眠りそこねし夜の遊びに

日に五回各駅停車がきて止まる駅舎簡潔な空間を持つ

五ワットのLEDに読み進む古代史小半時の就眠儀式

コロナとは何だつたのかと言ふやうな時が来る気がするのだけれど

この人もこの人もすでに亡き人と十年前の賀状処理する

幼子とやさしく見上げる春の空コロナ騒ぎのステイホームに  
今日は黄の昨日はグレーのフック下げグレーンは揺るるコロナ禍の街  
赴任地へ戻れぬあせりコロナ禍に閉ざる日々を伝えるメール  
うす黄の蝶は匂いを嗅ぐよううえ撫でてゆく  
時くればもつこうばらは咲き誇り何事もなかつたようなる卯月  
ウイルスに戦く今を残すべき言葉を選ぶ五年日記に  
大方は遅れて歩くわれの癖今日は並びて堤散歩す

久我田鶴子 公共放送

・羊

## 香川進の生きものの歌 23 田土 成彦

リモートやSNSに依れと言ふ外出自粛を言へば足る場ぞ  
SNSの危ふさんざん言つてゐた同じ口なり推奨するは  
キャッシュレス、リモート推奨 売らむかなこの機に乘じスマホ・パソコン  
ガラケーさへ持たぬわたしに言はれても リモート会議に反応はせず  
倒産や廃業しりめに次なる手かねまうけには機を見よとばかり

流行に乗りおくれまいとするがごとリモートといふを楽しんでゐる  
自宅からの画像と声がちぐはぐにリモートといふを楽しんでゐる  
流行に乗りおくれまいとするがごとリモートといふを楽しんでゐる

マリア・カラスとかアントン・カラスは世界的に有名だけれど、日本国内に限つてみればハシブトカラスが特に最近では都市部まで生育範囲を広げて、ごみの収集日などではうるさいぐらいだ。彼らはヒト以外の動物としてはトップクラスの知能を持つていると言われていて、人の顔を見分ける、一人遊びをする、道具を作つて利用するなど、様々な行動が報告されている。これも都市化が進んだ環境での現象かも知れない。

さて、歌に戻つて香川進の五十歳代の作、「木曽川の近くに住むようになった。」と「あとがき」にあるが、連作をさらに群としてたばね「水源から海に注ぐまで」の木曽川の自然と人事物と人情をまとめた希有の歌集である。

時代としては昭和三十年代の後半。戦後の復興から成長期へさしかかった時代の明るさが歌集の背景にあるような気がする。啼いている鳥の舌まで見えるような一面の陽光と萌芽の成長へ向かう自然界の明るいエネルギーを内包した状態のなかに作者もどっぷりと身を委ねている。それにしても本当に「震う舌」まで見えたのだろうか。ごみの収集日にはそっともの影から鳥を観察してみたくなった。

### 九月の歌

秋分のおはぎを食へば  
悲しかりけり わが仏  
なべて満洲の土

山本友一

(『黄衣抄』)

## 父の死と菜種河豚

久我田鶴子

『人間放浪記』（昭和57年刊）の中に香川進は、「釣人」として父・照治のこと書きいている。（引用は全文）

父香川照治は五十歳以後、働かなかつたから、釣など熱心であった。菜種ふぐのころ、帰郷のわたしは、勉学のために神戸にかえらねばならなかつたが、父は、夜とおし、かなしきの上でおもしの鉛を打つていた。釣師にとつては命のひとつの大鉛の幾片。

ようやく父が寝たころ、わたしは一番列車で発つことにした。高松までたが、どうしても海をわたる連絡船に乗れない。足がすくむのだ。ひき返して、また汽車に乗ると、高松に住んでいた姉と会つた。わたしは、生意気にも、やもめの父に女性の、田舎でいう茶飲み友達をさがさねばといつた。しばし黙つていた姉は、「父は今朝死んだ。」といつた。

照治は、明治六年八月五日生まれ。亡くなつたのは、昭和八年一月四日だから還暦という歳である。四男の進は、神戸商大に在学中。帰省した後、神戸に帰ろうという途中で足がすくみ、引き返す汽車の中で姉から父の死を知られたと言う。それほど突然の、思いも寄らぬ父の死であった。

京都で修行した表具師であったという父。だが、ここに書かれだとおりだとすると、亡くなる前の十年ほどは働くに、釣りなどしていたことになる。四十五歳で妻に先立たれ、以後ひとりなどしていたことになる。

とりで家族を養わなければならなかつたはずだが。

『甲虫村落』に、父を詠つた一連「てつせん」がある。

まだつぱらなその声のためわが父を詠むなくすきし死後二年

直接にわれにつながらり小鳥の卵日に投げあげし父のすがたぞ

おもいでをしばりてゆけば真向うから面うちきたる真顔ありて父

父の知らぬ小世界ありて屋根うらに巣くう雀をおそえれば飛ばす

われを抱きい寝るなりし父はなに抱きしならんか妻うしないしのち

病むわれを負いたる父は鉄線花の花びらひろきに鼻ちかづけしめき

十一首中九首に「父」が出てくる。死後三十年、まだ生々しくその声があるために父を詠むことなく過ぎたと言う。ようやく詠つた（詠えた）父は、直接の触れ合いを懷かしむ一方で、

「父の知らぬ」「われを抱きい寝るなりし」と寂しさも覗く。中でも注目するのは鉄線の歌だ。具体的な描写が父子の間に通う情感を湛えている。自らの年齢も父の没年に近づいていくなかで、父への思いを確認しようとした一連だったか。

そして、この一連に続くのが「なたねふぐ」の一連である。だが、そこに菜種河豚の歌は一首もない。並んでいるのは、母代わりだった姉の歌だ。そこでまた気になるのは、『人間放浪記』の中で、父が死んだのを「菜種ふぐのころ」と書いていたことである。一月四日では、まだ菜種河豚の頃には早すぎる。にもかかわらず、毒性の強い菜種河豚の頃としたのは何故だつたのだろう。謎めいた（謎めかせた？）父の死である。

# 今月の二人

松

笛崎 愛子

短歌との出会い

水揚げの作業を手伝う浜の児ら生きいき無駄なく仕事に励む  
家族みな総出の仕事に精一杯遊びいる児は一人も居らず  
深閑と異次元のこと松林ミステリーゾーンの木洩れ日の徑  
三陸の岬の奥の白き松どこか獸に似たる姿して  
潮風と松くい虫に苛まれ白き肌見す大樹の松は  
白々と輝きながら枯れ尽きし松の木肌をそうと撫でやる  
手を触るる松の木肌の冷ややかさわれの心に沁み透りくる  
生き終えて白き木肌をさらす松の悲しき声か枝の軋みは  
海風に晒され枯れし樹の下に可憐に揺るるスミレの小花  
みずみずと若木の萌ゆる松の根に世代交代の鮮やかにあり  
松林とおくに見つつ小島には椿咲きたり紅きが目にしむ  
押しよせる大海原の波の音は枯れゆくものの愁いを攫う  
照り返す碧き海原は果てしなく心しだいに安らいでゆく

私の母は石巻に住んでいましたが、東日本大震災後から仙台の我が家で一緒に暮らす事になりました。介護度5で表情も乏しかったのですが、ひ孫達と接するうちに、会話も多くなり表情も豊かに明るくなつてきました。その母も二〇一六年に亡くなり、満たされない日々を過ごしていた時に、泉区の市政だよりで短歌教室が目に止まりました。早速見学に行き即入会となり、その後年に仙台の湾の会へも入会しました。短歌に出会い、今年で五年目になります。

佐久間先生の御指導は、厳しさの中にもユーモアもあり、中でも「美しい心」「メモをとる」「テーマを持つ」という教えは今後の私の生き方に通じていく事でした。孫達も大きくなり、手を離れつあります。夫の写真撮影に同行をし、メモを取り帰宅後に歌を詠むという余裕も出て来ました。毎日の生活の中からテーマを見つけ、楽しみながら詠んでいきます。

私はまだ調べも表現力も未熟ですが、日々研鑽を重ね、これぞと思う歌を一首でも詠む事を目標としています。マンネリから脱し、少しでも独自性のある歌を詠めるよう励んでいきたいと思います。

## 病癒えて

唐澤美恵子

健康新聞

# 今月の二人

三十分見舞いに来てもらう毎夜なり帰り行く夫の足音を追う  
肌着にもシーツ類にも夫の手が折目正しくとどけられたり  
介護にと仮置くベッド今日離れ住み慣れし部屋二階へと戻す

梅刻み病める義弟の見舞いにと持ちゆく夫は「細かく」と言う  
義弟「うまい、うまい」と喜びぬたかが梅漬け命をつなぐ  
予後の日も今日で二年の時が経ち「完治しました。」主治医は言えり  
歌詠むも病と共に作り出し病癒えきて欲張りとなる

紫は母が好みし色なりき菖蒲桔梗に紫苑と生ける

テレビ漬け「目が腐るぞ」と夫は言い誘いてくれし善光寺参りを  
風邪引けば我が家行事卵酒熱さ加減に気を配りつつ

小学生集めて作る物作り星に野菜にブドウと猪を

取り終えし梅の実適量ほつとしてビン一杯に砂糖漬けする

老人会活動や地域活動など楽しく仲間作りをしています。小学生たちの体験学習のお手伝いもさせて頂いてきました。

平成八年から二十年間地域の農家の主婦たちを中心にして地域で取れた農畜産物を使った加工施設を運営してきました。  
パン、アイス、おやき等三部門に分かれて活動をしてきました。大変人気のある商店を出していました。常時十五~六人が働いていました。高齢化が進み体力の衰えから閉店希望者が多くなり、十六年一月に閉店をしました。

この年加工所通りも終わり、何か社会勉強をとシニア大学校に入學して通い始めました。体調が崩れて病院通いとなり、八月手術をして十月退院、そのまま転院して、治療とりハビリになりました。入院中は個室住まいでの思いつくままノートに書いていました。先生方のお取り計らいで卒業もさせて頂きました。シニア大学校でお世話になりました深井喜久代先生のご紹介で近藤芳仙先生の主宰されておられます地中海信濃支社依田川歌会にお世話になることが出来ました。

## 輝きながら枯れ尽さし

## ◆今月の二人・唐澤美恵子作品評◆

評者・久我田鶴子

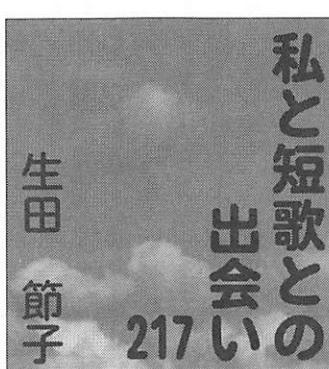
## 夫の手が折目正しく

- ◆今月の二人・唐澤美恵子作品評◆
- 唐澤さんは、長野県東御市在住。今はまた元気に活躍されているが、病気で入院したことが熱心な作歌に繋がったようだ。
- 唐澤さんは、長野県東御市在住。今はまた元気に活躍されているが、病気で入院したことが熱心な作歌に繋がったようだ。
- ・深閑と異次元のこと松林ミステリーゾーンの木洩れ日の徑
  - ・潮風と松くい虫に苛まれ白き肌見す大樹の松は  
三陸の岬の奥の松林であるらしい。深閑とした松林の中の木洩れ日の徑を進んでいくと、白い肌を見せる松の大樹がと、その松に導かれたかのような展開である。
  - ・白々と輝きながら枯れ尽きし松の木肌をそつと撫でやる  
どうやら潮風と松くい虫によって枯れてしまつた木らしいが、「白々と輝きながら枯れ尽きし」には、生ききつた命への賞賛の思いが表れている。だからこそ「そつと撫でやる」という行為へと自然につながるのだ。
  - ・海風に晒され枯れし樹の下に可憐に揺れるスミレの小花  
枯れた大樹と、その下に揺れる薑の花の対比。大と小、厳しさと可憐さ、死と生……。薑の花の可憐さがいっそう引き立つ。
  - ・松林とおくに見つつ小島には椿咲きたり紅きが目にしむ  
船に乗つて海上からの眺めか。松林を遠景に、近景に小島に咲く椿を配する。四句で切つて、「紅きが目にしむ」と収めたところ、表現として紅い色が印象的で心憎い。
  - ・水揚げの作業を手伝う浜の児ら生きいき無駄なく仕事に励む  
一連の初めに置かれた、浜で水揚げ作業を手伝う子供たちを詠った歌。二首のみで、あとは松の歌になつてゐるが、「生きいき無駄なく」の具体は何か。何を水揚げしていたのか。ここを中心とした作品も見てみたくなつた。

- 細やかな夫の気遣いは、妻にだけでなく病気の義弟にも向けられている。あるいは、ここで刻んでいるのは作者であつて、夫は傍から「細かく」と言つてゐるだけなのかもしれないが。歌詠むも病と共に作り出し病癒えきて欲張りとなる。病を得たことから始まつた作歌は、病が癒えてきたことによつて短歌への欲が出て來たという。「欲張りとなる」という自己観察は、むしろ頼もしい。
- 取り終えし梅の実適量ほつとして「ビン一杯に砂糖漬けする健康であるからこそ出来る作業だ。それにしても「適量」ということはある。夢中になつて三十キロ以上もいで、その後の作業をする母に悲鳴を上げさせたことを思い出した。

「私と短歌との出会い」それは山村金三郎先生との出会いでした。昭和六十二年（一九八七年）二月だったと思ひます。短歌を勉強したいけれどどうしたらと悩んでいた私は、読売新聞の催し紹介で先生がNHK大津放送局で短歌の個展をされるという小さな記事を見つけ、山村先生がどんな方かも知らずにその会場へ行きました。玄関を入って左手のお部屋に掛け軸や色紙などが並んでいて何人かの女性がおられ初めで先生にお会いして短歌を勉強したいとお話ししたら、「あんた僕の弟子になるか」と聞かれ、「はい」とお返事を致しました。それが先生のご縁の始まりでした。

短歌を勉強できる道がやっと開けたのがとても嬉しく、明るい気持で玄関前の階段を下りたのを思い出します。三月は逢坂の公民館へ伺い、四月から大津の西武デパートにファミリースクールが出来、「近江の万葉と短歌実作」という講座の講師をされる事になり、先生のおすすめでそちらへ入りました。毎月第一と第三の水曜日午前十時十五分から十二時十五分まで、前半は万葉集のお話で後半が短歌実作でした。先生は熱心にご指導下さりしばらく続きましたが、ファミリースクールが閉鎖となり困った私達はお友達のお世話を島ノ関の自治会館



の一室をお借りできる事になり、「文月の会」というグループを作り四名で今まで通り第一と第三の水曜日午前十時から十二時までと先生のご指導を受ける事になりました。その頃先生は洛東高校を定年退職され、進学塾の講師をされていましたが、糖尿病を発病され毎日の食事制限と運動をしつかり守り闘病生活をされていて、教室にきなり守り闘病生活をされていて、教室にきた。千里眼のような目をし、右手に筆を持った姿は先生のお姿に重なります。その大切な先生が平成十五年（二〇〇三年）五月二日、短歌を教えに行かれた帰り道、京阪電車の中で意識をなくされ急死されました。動脈瘤破裂でした。丁度地中海全国大会京都大会の前で一生懸命準備されていましたので先生もさぞご無念だったろうと思ひます。先生は物をこまかくこまかく、しっかりと見る事。日常生活の中で五感を働かせて生きる事。と教えて下さいました。そして人の心に響く歌を作りたかったら誠実に生きる事やともおっしゃいました。今回九十歳を過ぎた私にこのエッセイを書く機会を与えて下さり有難うございました。教えを受けたこ恩返しと思い、先生の生きざまの一端を拙い文ながら書かせて頂きました。